

“MY TOWN” うおっちゃん

歩 & 足 目 & ラテス デス

Vol.77

近代の大師堂、 130年後の平成にて終焉

〈西予市宇和町〉

岡崎 直司

タウンリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー



山田大師堂外観('14.4.16撮影)

西予市宇和盆地の石城平野、その最大の溜め池「大池」のほとりに、山田大師堂がある。お大師信仰は、四国の場合言うまでもなく弘法大師だから、八十八ヶ所の札所や遍路道周辺には数多く存在する。

がしかし、この建物は少しその趣きが異なっている。通常は屋根の形が宝形造りと言って、平面が正方形の小堂というスタイルが多く、第43番札所明石寺の大師堂（明治13年築、国登録有形文化財）などはその好例。そうした通例と比較すれば、この大師堂は見ての通り間口六間（約12m）奥行き三間半（約7m）の広い造りとなっていて、屋根も寄棟形式である。



大師像が安置されている祭壇



明石寺大師堂(明治13年築)

肝心の心のお大師様が祀られている場所は、正面右側の四分の一、一間半相当にしか過ぎない。建築的には実に簡素、全体としては実に素朴な建物だが、重要なのはその広さにある。それは何故なのか、何とかその理由に迫ってみよう。

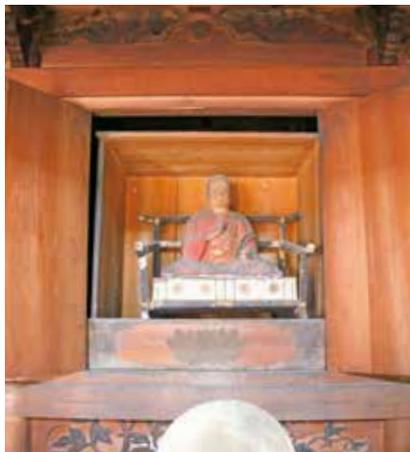


屋根裏(チョウナ削りの跡もくっきり)



棟札

建築年は、調査の際に発見された棟札や寄附銘板などで分かっている、明治19年4月21日（1886年）の上棟造営。



大師像

つまりそれは、近代明治中期の堂宇建設、今から丁度130年前の出来ごとだった。その当時の時代背景を探ってみると、各県に置かれた県令という役職が知事という名に変わり、同21年には市制及び町村制が公布され、いよいよ翌年にはこの石城地区にも山田村と笠置村が誕生した。

つまり、幕末動乱のご一新を経て、宇和島藩もやがては愛媛県（同6年）となり、同10年には第一回の県会も開かれ、全国的には自由民権運動の高まりなどもあって14年には国会開設の詔みこと（のり）が発せられる。この大師堂が建てられた時代の気分というのは、多分に因習深い田舎であったとしても、新しい地方自治の風が吹き始めたであろうことが充分に察せられるのだ。

そんな頃合いに、山田の人々はどうしたのか。今に残る三枚の寄附銘板（岡組・中組・谷組）によれば、梶原庄屋の拾円を筆頭に末端は一銭、二銭まで、約120名ほどの善男善女が総額約83円を寄進し、このより大きな大師堂を建立した。それぞれの暮らし向きや経済状態に見合う形で、皆が負担した。当時まだ村は豊かでは無かった。卯之町の清水長十郎が明治14年に養蚕伝習所を設置して、地域に何とか養蚕技術を根付かせようと頑張っていたが、宇和盆地に普及し村が豊かになるのはまだずっと後、早くも明治30年代以降である。しかし、それで

も山田の先人たちは広い大師堂が必要と考えた。それまでの大師堂が古くなり、どうせ建て替えるなら広いものにしようと誰かが言ったに違いない。梶原庄屋か、それは分からない。村の寄り合い場所として、どうしても新しい村づくりの為には、広い場所がいる。まだ集会所などという気の効いた公共施設など望むべくもない頃である。ひよっとしたら、市制や町村制などの噂話がチラホラしていたのかも知れない。自治、という近代ならではの言葉の響きも、明日の村づくりを想う時、胸の高鳴る気分が漂ったのかも知れない。ともかく良きリーダーの元、協議の上でそうなったのだと思われる。そうして不思議な大きさの大師堂は出現した。

やがて幾星霜、村ではいつの間にか時代と共に宗教感も薄れ、お籠りや読経の声、寄り合いも無くなっていった。少子高齢化、過疎の影に怯えるかのように堂宇の維持も放棄され、残念ではあるが平成28年をもって解体することとなった。

ここに貴重な写真が残されている。「四国巡拝同行中」「奉納」からうじて読み取れる文字からは明治20、あるいは30年代春の写真らしい。山田村の先祖たちが四国遍路に出かけ、琴平の福井という写真館で記念撮影をし、村に戻ってから奉納したもの。中年に混じってまだ若い二十歳前後と思いき若者も写っている

ところを見れば、当時は通過儀礼としての村の習慣があったのかも知れない。貧しくとも助け合っていた村のコミュニティも感じられ、何かを彼らから教えてもらったようにも感じられた。



四国巡拝同行中



奉寄進板額（岡組・中組・谷組）